

江東の樹木 ⑥

霊雲院の桜と永代寺歌仙桜

江東区深川江戸資料館

【弥生三月】水も温み、春の陽気を感じてくれば、待ち遠しくなるのが「桜」です。「桜」を観ると、自然と心がウキウキしてきます。「桜」は、今も昔も人々を引付ける不思議な魅力があり、日本の国花になっています。江戸時代、桜の名所・行楽地は各地にありましたが、特に上野・隅田川堤・飛鳥山・小金井橋（小金井市）などは津々浦々名前が知れ渡っており、人々が集い楽しむ憩いの場になっていました。

江東区においても、「砂村元八幡宮」（資料館ノート第41号参照）は有名で、当時の観光ガイドブック類に紹介されています。現在、区内には木場公園・猿江恩賜公園、仙台堀川公園や緑道公園など所々で憩いの場が整備され、人々に潤いを与えています。今号は、江戸時代の深川で、桜や樹木の名所を紹介します。

「深川の新寺」霊雲院周辺

宝暦8年（1758）小名木川の隅田川口に架かる万年橋の南詰めに、下総国（千葉県）から霊雲院が移ってきました。この寺院は、8代将軍吉宗の庇護もあり、当資料館の約7倍（5,365坪）の広大な敷地がありました。『江戸名所図会』（天保7年・1836）には、境内や周辺の様子が細かに描かれ、当時の様子を知ることができます。この寺院も、桜の名所として有名で、季節になれば「深川の新寺」と呼ばれたいへんな賑わいでした。

隅田川沿岸の桜は、向島付近の墨堤がたいへん有名でした。ここから下流は、武家屋敷・御船蔵・蔵など建物群が続きます。その中で、江戸市中の人々から見れば、隅田川に架かる新大橋は、一種のシンボリックな役割を果たす建造物でもありまし

た。新大橋周辺は、今と違って周り高い建造物等もなく、また、腫物はれものに御利益があることで有名な「正（柁）木稻荷」があり、橋桁の高い万



緑道公園の桜並木

年橋、隣には広大な敷地を持つ霊雲院の生茂った樹木類という風光明媚なロケーションで、江戸の人々に憩いと潤いを与える場所でした。葛飾北斎の『絵本隅田川兩岸一覽』（文化3年・1806）に、「市中の花・新寺の新樹」として描かれた、新緑の樹木に覆われている霊雲院や、歌川広重の『絵本江戸土産』（嘉永3年・1850）などを見れば、当時は賑わえます。

永代寺歌仙桜と周辺の樹木の名所

永代寺は、寛永4年（1627）隅田川河口にあった永代島という砂洲さしづに創建されました。当時は、22,193坪余の敷地があり、成田不動尊をはじめ江戸出開帳の場として大いに賑わい、江戸市中からの参詣者を多く集め栄えました。この寺の境内は、『江戸名所図会』（天保7年・長谷川雪旦画）にも見られるように、たいへん広大で、そこには池があり松や柳などが生茂る立派な庭園でした。年中行事として、毎年3月21日～4月15日（『図会』では3月28日迄となっている。）まで「山開」として一般に開放し、諸人が群集する名所として賑わいました。

正徳の頃（1711～16）、園女そのじよという人が境内に桜を植えました。園女（寛文4年～享保11年・1664～1726）は、伊勢山田（三重県）出身の女流俳人で、松尾芭蕉・井原西鶴とも交流がありま



霊雲院跡（現在、清澄1-7）



園女（『俳諧百一集』芭蕉記念館蔵）

した。元禄5年（1692）大坂に移住し、俳諧師・点者（宗匠・師匠）として活躍しました。同7年来坂した芭蕉を園女亭に迎えた時、芭蕉から「白菊の目に立て見る塵もなし」の句を贈られ、この句を立句に歌仙を巻いています。後年、宿願の俳書を編纂した時、書名には『菊の塵』と名付けています。一説には、園女のもてなした料理にあたり芭蕉が亡くなったといわれていますが、真相はわかりません。夫との死別後、宝永2年（1705）其角を頼って単身深川へ移り住み、眼科医を開業し、其角一派と交流を持ちました。園女の植えた桜の木は三十六株であったことから「歌仙桜・園女桜」と呼ばれるようになりました。「歌仙桜」は、世間にその名が知られており『続江戸砂子温故名跡志』（享保20年・1735刊）巻之五・名木類衆・桜樹の部に紹介されています。その後、宝暦5年（1755）に永代寺門前の「青柳屋」が植え継ぎ、その際に、同門前に住んでいた「園」という歌人が、愛木の桜を奉納し「碑」を建立しました。桜は焼失しましたが、この碑と、昭和6年4月に建てられた「園女歌仙桜之碑」（題字・渋沢栄一揮毫）が深川公園に残っています。

桜に関する文化財として、深川不動尊に「志満壽左久良碑」があります。この碑は、新橋の芸妓若菜屋島次（鹿島をしま）が明治15年（1882）に建立しました。彼女は、信仰心が厚く、

不動尊を信仰して、深川不動尊の境内に桜樹数十株を寄進しました。その事跡を記念した碑で、裏面の鳥次の略歴は、仮名垣魯文が記しています。

富岡八幡宮も、江戸時代、「古今絶品の牡丹花」（『絵本江戸土産』・嘉永3年）として有名で、盛りの頃は大変綺麗で参詣者も多く浮世絵の題材にも取り上げられています。

清澄通りに架かる黒船橋の近くに「黒船稲荷」（牡丹1—12—9）があります。この稲荷は、『東海道四谷怪談』で有名な歌舞伎作者、4世鶴屋南北（大南北）の宅跡として知られていますが、「深川名所一ノ古跡ス・メノ森」〔江戸切絵図・近吾堂版（嘉永3年）〕としても有名でした。ここは、数知れない雀がいたので「雀の森」と呼ばれ、深川の名所の一つでした。東隣の松平阿波守の抱屋敷には、天明6年（1788）庭園が造られ、雀の森に因み「雀林荘」と呼ばれました。



園女歌仙桜碑（深川公園）



志満壽佐久良碑（深川不動尊）